

令和4年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月18日実施)	総合評価(3月30日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	<p>①幅広い進路希望に対応できる教育課程の編成と、進路保障の基盤となる基礎学力の充実。</p> <p>②課題解決に向け知識・技能を駆使する力と、解決に向けて行動する力の育成伸長。</p> <p>③学習過程の改善を通して、自己肯定感を高める。</p>	<p>①今年度入学生より実施される新教育課程の運用と、それ以前の入学生の教育課程の移行期対応を進める。</p> <p>②③今年度入学生で実施される一人一台端末を活かした「主体的・対話的で深い学び」を育む授業づくりを推進し、他者とのかかわりの中で自己肯定感を高める。</p>	<p>①多様な進路に対応した履修パターンを実現できるよう新教育課程の運用について、移行期を考慮しながら展開していく。</p> <p>②③一人一台端末を活用して、生徒自身が学習への目的意識を高め、主体的に学ぶ授業づくりを推進するため、自らの考えをを広げ深めることができた」の回答で「かなり当てはまる」の回答率が5割を超えたか。</p>	<p>①ガイダンス機能の強化を図り、適切な履修指導を行うことで新教育課程移行期に対応できたか。</p> <p>②③一人一台端末を授業内で有効活用することができたか。生徒による授業評価質問項目で「他者の考えを知ることにより、新たな考え方を知らなかった」の回答が5割を超えたか。</p>	<p>①共修科目や教科書選定など新教育課程の移行期対応ができた。</p> <p>②③一人一台端末の利活用の促進が可能なアプリケーション会社(ロイロ社)講師を招いた研修会を行い、具体的な利活用シーンを全職員で共有することができた。また、生徒による授業評価の質問項目では該当の質問で目標の回答率が5割を超えた。</p>	<p>①新教育課程がグランドデザインやスクールポリシーを実現するものになっているのかを再検証し改善していく。また、履修指導が進路実現につながるようにキャリア支援グループと連携しながら履修指導の更なる強化を図る。</p> <p>②③新教育課程の学力観を全職員が理解するとともに基礎基本の定着を図っていく必要がある。</p>	<p>①新旧教育課程が混在している中で、生徒の将来を見据えた教育課程の検討が実施されている。今後も新しい学力観について教員自身が学び続けてほしい。</p> <p>②③今後も Chromebook を利用し、アプリを用いた授業の工夫をしてほしい。同時に、情報モラルや情報リテラシーについての教育も継続してほしい。</p> <p>②③生徒による授業評価の信頼性を高められるよう実施方法を整え、PDCA サイクルを回してほしい。</p>	<p>①新教育課程への教務的対応は無事に終了した。新教育課程がグランドデザインやスクールポリシーを実現できるかの再検証及び、新たな設置科目の提案や、現在ある科目の位置づけの確認作業なども終了した。それぞれの科目を実際の教育課程に有機的に組み込んで履修指導につなげていくことが次年度の課題である。履修指導が進路実現につながるよう、履修指導の更なる強化を図る必要がある。</p> <p>②③現在の授業は新学力観を取り入れ切れていない部分もある。新教育課程の学力観を全職員で理解し、新学力観に基づいた授業を実現させる組織的な授業改善を実施することが次年度の課題である。</p>	<p>①生徒自身に自分の将来を見据えて科目を主体的に選択する力をつけさせるために、職員が適切な履修指導をする。そのための情報共有を職員会議で計画的・組織的に行い、履修指導の在り方について全職員の共通理解を図るとともに、進路指導に接続させる。併せて、新教育課程の学力観や、観点別評価について、全職員が学べる機会を確保するための研修を適宜行う。</p> <p>②③指導と評価の一体化の推進を継続して行い、授業改善へとつなげる。また、授業改善がどの程度進んだかをアセスメントする「生徒による授業評価アンケート」について、信頼性のあるデータとなるように取り方を引き続き工夫していく。</p>
2 (幼児・児童・) 生徒指導・支援	<p>①一貫した生徒指導と多様な生徒への個別支援を通して、社会に求められる人材としての資質を向上させる。</p> <p>②行事・委員会・部活動等への主体的な取組による、魅力あふれる学校生活の創造。</p> <p>③外国につながる生徒との交流を促し、文化や思考の多様性を相互に理解することを通して多文化共生教育を推進する。</p>	<p>①SCやSSWとの連携・情報共有を十分に図り、個別支援と相談体制の充実を向上させる。</p> <p>②従来の形式に拘らず新たな内容を模索し、行事の中止や縮小を避け生徒の活動を保障する。</p> <p>③外国につながる生徒との交流会等を企画し、多文化共生教育を推進する。</p>	<p>①年次ごとの教育相談担当職員を中心にSCやSSWと連携・情報共有し、個別支援の体制を構築する。</p> <p>②委員会活動の可視化を図り、教員主導でなく生徒が考え、提案する機会を増やす。</p> <p>③ICT技術を活用し多文化共生推進事業等の維持発展に努める。</p>	<p>①SCやSSWと連携し適時にケース会議を開催できたか。また、外部関係機関との連携を図ったか。</p> <p>②新たな形式の行事を実践し、生徒の活動意欲を高めることができたか。委員会・部活動ではアンケート等で「主体的に活動できた」割合が7割を超えたか。</p> <p>③新たな多文化共生教育推進のための企画が打ち出せたか。</p>	<p>①来年度、教育相談コーディネーターが3名体制になる状況を生かし各年次の個別支援の充実を図る。また、生徒の学校生活上の不安や相談内容について全職員で情報共有することができる「座間総合ビックデータ」を活用する。</p> <p>②体育祭とスポーツ大会の試合の組み立てやタイムテーブルの作成を指導し、更に生徒自らが立案できるようにする。</p> <p>③在県歓迎会の企画だけでなく、国際フェスタに国際交流委員会として参加できるような企画を立てたい。</p>	<p>①心の悩みや学習上の悩みを相談できる環境はとて大切である。支援が必要な生徒に対して、SCやSSWを有効に活用して生徒の心や不登校の生徒に対する支援を充実させてほしい。</p> <p>③多文化教育について、外国につながるのある生徒たちを助けるというのではなく、彼らの文化を尊重しようという考えを生徒や教員が持ち、引き継ぎ、多文化共生の精神を培ってほしい。</p> <p>③国際交流委員会の活動などを通して、日本の生徒と外国につながるのある生徒が共に主体性をもてるような活動を行ってほしい。</p>	<p>①支援を必要とする生徒をスクールカウンセラーにつなげ、適切な情報共有を図ることができた。しかし、月に2回のカウンセリングだけでは足りない月もあったので、今後は更に相談窓口を充実させるなど生徒への支援を厚くしていきたい。</p> <p>②年次スポーツ大会では、ほぼ生徒だけで企画、運営ができたが、全体を見通しての準備が十分でなかった点も見られた。生徒を見守ると同時に適時の支援態勢が課題である。</p> <p>②③行事において、生徒から新たな企画も生まれた。今後も生徒に新たな企画を考えさせ、その実現につなげていきたい。</p> <p>③国際交流では、今後も日本語指導者や多文化教育コーディネーターと連携を図っていく。</p>	<p>①今後は、年度初めに各年次の教育相談担当の教職員及び教育相談コーディネーターを生徒へ周知する。また、来年度からはSC、SSWが毎週来校するので、支援を要する生徒へ個別の支援をより積極的に行えるよう、校内体制を整える。</p> <p>①全職員が生徒支援の意識を持って生徒の変化に対する感度を高め、それを支援につなげる体制づくりを進める。</p> <p>②学校行事を実施する中で失敗を通して学ぶこともまた有益であると生徒、教員で共有し、生徒の積極的姿勢を引き出し、多くの経験を積み重ねていきたい。</p> <p>③国際フェスタはコロナが終息すれば以前のように国際交流委員会を中心とした企画を主体とするとも考えられる。今後も多文化共生、国際理解を提唱する存在として、単なる文化紹介に留まらない双方向性を持った本校独自の取組を進める。</p>	

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月18日実施)	総合評価(3月30日実施)		
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等	
3	進路指導・支援	①インターンシップや高大連携講座などへの積極的取組を促し、キャリア形成意識の向上を図る。 ②総合学科の特徴的な学びを成熟させ、「課題研究」の充実を図る。 ③多様な進路選択に対応できる基盤の育成。	①②多様な学習や体験活動を通じて生徒が課題を克服し、自らを活かす力を育成する。 ②課題の設定など「探究的な学び」をくり返し実践することで課題解決能力を育成する。 ③キャリアガイダンスを通して、進路希望の実現に向けて主体的に努力する姿勢を育てる。	①高大連携講座、インターンシップ等への積極的参加を促し、キャリア意識を育成する。 ②「産業社会と人間・総合的探究の時間」の一貫したプログラムの構築と「課題研究」の内容をより充実させる。 ③総合型選抜や公募制推薦、一般受験への積極的な挑戦を促す。	①②「産業社会と人間・総合的探究の時間」での学習で高大連携講座やインターンシップ等への積極的参加を促すことができたか。また参加した生徒の個々のキャリア意識が高まったか。 ③生徒は指定校推薦以外の受験方法にも積極的に挑戦できたか。新たに進路アンケートを実施し、高い進路満足度が得られたか。	①②「産業社会と人間・総合的探究の時間」での学習で校外学習や高大連携などの講座にコロナ以前を超える生徒が参加した。また参加した生徒の個々のキャリア意識が高めることができた。 ③大学進学者が例年より増加した。指定校型は減り、総合型・一般受験の人数、合格率はともに増加した。	①②課題研究のテーマを決定するまでに時間を要するので改善したい。また、探究的な学びを実践することで生徒に合った進学先の受験に対応できるような体制を整え課題研究の内容を充実させていく。 ③引続き基礎学力の向上を図り生徒の進路実現にむけた指導を学校全体で取り組む。	①②進路決定においては、コロナの状況の中でもしっかりと生徒の道筋を付けられたことについて、高く評価している。 ①②コロナが収まったので、様々な体験学習をもっと増やしてほしい。 ①②課題研究で、自分のやりたいことを発見してそれを深め、成果を進路につなげられれば、総合学科らしい充実した進路指導になるだろう。研究成果をさらに進路実現に活かしてほしい。 ③外国につながるのある生徒に対して、資格試験受験への資金援助の方法を引き続き模索してほしい。	①②「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」での校外学習や高大連携などの講座に、コロナ以前を超える数の生徒が参加した。今後も、校外学習に参加することの有益性を強く訴えかけ、生徒全員が3年間のうちに少なくとも1つは校外学習に参加するよう推進していく。 ①②「課題研究」の成果が進路決定にもつながることから、研究テーマの決定をどのようにシステマ化するかが課題である。 ③大学進学者が例年より増加した。指定校型は減り、総合型・一般受験の人数、合格率がともに増加した。生徒が最適な進路先や受験方法を自ら選択できることが大事であり、そのための3年間を通じた指導体制の構築が必要である。	①②進路実現に向けて、引続き基礎学力の向上を図りつつ多様な学びを生かした指導に学校全体で取り組む。 ①②課題研究のテーマ決定を効率的に行うためには、調べ学習の充実に加え、他者との対話の機会拡大が必要である。発表回数増加や外部人材の投入などを含め検討したい。また、探究的な学びを実践することで進路選択の幅が広がることから課題研究の充実を図っていく。 ③安易に指定校型に頼らず、自分の目標や適性を自覚させ、最適な進路先や受験方法を選択する力を付けさせる指導体制づくりに努める。また、奨学金担当の生活支援グループと連携し、進学後の経済的な援助に繋げていく。
4	地域等との協働	①地域に潜在する教育力を活用し、いろいろな事に興味関心を持たせ積極的に行動することで、社会をしなやかに生きる力を獲得させる。 ②安全・安心な学校生活を保障する環境整備及び防災教育と災害発生時の体制を整備する。	①積極的に地域の介護施設や教育施設からのボランティア要請に応える。 ②防災教育を行うことで防災意識を高めるとともに防災訓練等で防災意識を継続的に持たせる。	①ボランティア情報など Google Classroomにも発信する。 ②防災訓練が実施するだけでなく実践方法に工夫する。また、校内の防災用品を再点検し計画をたて、更新、充実させていく。	①ボランティアに関する情報を生徒へ提供できたか。また、教育的意義を伝え積極的に生徒へ参加を促したか。 ②防災意識を高める訓練等を実施することができたか。また、校内の防災倉庫の整理及び点検や更新について計画的に実施できたか。	①3年ぶりに地域清掃を実施し、地域貢献に努めるとともに、学校周辺の危険箇所がないか確認を行った。 ②防災避難訓練ではシェイクアウト、避難経路の確認、地域班別の集合を行った。また、グラウンドへの避難を含めた避難訓練を実施することができた。老朽化した学校保管の防災物品の更新を行った。	②防災意識を継続的に高めるために避難訓練の実施時間や方法について今後も様々な展開を模索する。また、イレギュラーな状況の中で、できる限り多くのリスクに対応できるための訓練内容を考えていく。引続き、防災物品の更新を計画的に行う。	①コロナ前は地域の方々にも避難訓練に来ていただいたり、一緒にやったりしていたこともあった。今後、新型コロナ対策が緩和されたら、地域との協働や交流を再開する方向で進んでもらいたい。	①新型コロナウイルス感染症の影響でボランティアや地域と活動する機会は少なかった。 ①コロナが収まりつつある中、生徒会役員のみでの少人数ではあったが、赤い羽根共同募金の校外募金活動が実施できた。個人のボランティア参加が少ないので参加を増やしたい。 ②防災訓練の中で、生徒への防災意識を高める活動ができた。 ②東日本大震災時に幼少期で、震災の記憶があまりないという生徒が入学してくるようになってきており、今後もいつ起こるかかわからない災害に対して、防災訓練等で継続的に防災意識を高める必要がある。	①ボランティア活動や地域貢献活動に参加できる声掛けとボランティアに関する情報を積極的に生徒へ提供し、参加を促す。 ①福祉厚生委員にも参加を要請し、ボランティアに関する情報発信を Google Classroom を利用して強化する。 ②防災訓練が形だけの訓練とならないように企画を立て、実践的な工夫を凝らして計画実施する。 ②防災用品は1年単位ではなく数年単位で計画的に購入、更新を行う。
5	学校管理 学校運営	①職員のワークライフバランスを推進する働き方改革の促進。 ②生徒と向き合う時間を確保するために、組織的な学校運営と校務の効率化を図る。	①②今年度実施される生徒一人一台端末導入のための通信環境やアプリ等の整備を計画的に行っていく。 ①②多様な働き方に対応できるよう各機器やアプリの使用法について、職員への周知を計画的に実施していく。	①②アクセスポイントや各機器等、計画的な整備を継続する。 ①②積極的にデジタル化へ切り替える。会議はリモートで併用する。ICT機器を利活用することで、校務等の効率化を図る。	①②生徒一人一台端末導入に対して対応できる Wi-Fi 環境など整備ができたか。 ①②リモート会議を行うための環境整備やデジタル化を進めることができたか。校務の効率化のため ICT 活用の研修や情報提供を実施できたか。	①②アクセスポイントを1教室1台に増設した。電波の入りの良くない特別教室への設置も着実に進めることができた。学校内規ファイルを紙で全職員に配付することを中止しデジタル化した。その他、来年度から紙ベースからデジタルベースへ変更が決定した案件もあり少しずつではあるが、学校全体がペーパーレス化を意識するようになってきた。	①②アクセスポイントの整備は進んできたが使用頻度が多くなり数年前に設置したケーブル等の不具合が出てくるようになってきている。改善の要望が増えてきており今後も整備を継続する。ペーパーレス化は少しずつではあるが意識する傾向にある。デジタル化を実行するだけでなく使いやすいデジタル化を目指す。	①生徒一人一台端末について、購入できない生徒も出てくる可能性がある。その対応において生徒が引け目を感じないような配慮をしてほしい。 ②生徒だけではなく、どの教員も勤務形態に関わらず、容易に学校の通信ネットワークにアクセスできるように学校内の ICT 環境を整えてほしい。	①ICT を活用する上で校内の Wi-Fi 環境は整ってきている。授業においても ICT を使用する機会が着実に増えている。今後は、全学年で一人一台 PC を使用するので Wi-Fi 環境について再確認をしたい。 ①②ICT の使用頻度が高くなった反面、通信機器の不具合や ICT 環境改善の要望があり、今後も環境整備を継続する必要がある。また、働き方に関わらず ICT を利用しやすい整備を進めていく。 ②職員間では、現状は紙での資料作成や配付など、紙の使用が中心ではあるが、デジタル化やペーパーレス化も意識され実践されつつある。	①今後想定される ICT 機器の整備に備え、それぞれの機器の使用頻度や活用方法を定期的に確認する。また、常にオンラインを用いる教室の環境を整備し、誰もが使いやすいデジタル化を進めるとともに計画的に機器の購入、更新を行う。 ②今後、職員の服務に関する申請入力については、デジタル化を推奨し対応していく。 ②マニュアル等は全員に配付をするのではなく、できる限りデジタルデータにまとめ、紙での印刷数部を決めて作成し、閲覧できるように工夫をする。 ②デジタル化、ペーパーレス化を推進し、会議の効率的運営を進め、働き方改革につなげる。